

く悠々と吐き、また吸う。ただし、数息観の名に示されているように、こうした呼吸の回数を数えるのである。吐いて吸って一回と数えるわけである。「私達が行うと最初は息苦しくなってしまう。だが、少し慣れてくると自分でもわかるぐらいに呼吸の感覚が長くなってくる。又、回数も最初は十回もしないで気が散ってしまうが、これも次第に回数が増してくる。こうなると気分が非常に落ち着き、心なしか疲労が安らぐ。正座してやってもよいが、仰臥して行ってもよい。」というように、実践的な文章まで時々あらわれて、本書を読みながら書齋でちよつと調息を試みってしまうのは私だけだろうか。もちろん本書は実践書ではないのだが。

軽妙な文章につられて一気に読み進むが、長年養生書の研究に研鑽を積まれてきた著者なだけに、終章に近づくにつれ、「養生」が単なる実学ではなく、よりよく生きるための一つの思想でもあったことを、懇切に説いて重みを増す。江戸時代の日本人が自己の身体と向き合うとき、単なる肉体ではなく、精神性と深くつながるものとして凝視してきたことを今更ながら納得させられる。

なお本書は対象を研究者でなく一般読者に想定しているため、基本用語の説明もたいへん丁寧でわかりやすい。「養生」に関心のある方だけではなく、医学史研究一般の入門書としてもお勧めする。

(鈴木 則子)

〔大修館書店、千代田区神田錦町三―二四、電話〇三―三二九五―一六二三一、平成十三年六月一日、B六判、一九七頁、本体一六〇〇円〕

川原 秀城 著

『毒薬は口に苦し』

今回図らずも川原秀城東大教授の『毒薬は口に苦し』の書評を求められる栄に浴したので思いつくまま述べることにした。

本書を見て第一に、中国本草書の歴史が、『神農本草経』から始まり、明の李時珍の『本草綱目』が現われるまで、本草書の大まかな内容、分類、システムの構築が一貫してあり、しかも道教の影響が強くあったことを知ることができる。

また、筆者が言っているように記述に当って専門書、研究書のような固苦しさをさげ、平易に誰でも批評できるような心掛けたという。

この二点をとっても評者は本書を評価し、紹介の労をいとわないのである。

さて、本書はA五判、三〇六頁からなり、そのサブタイトルは「中国の文人と不老不死」となっている。

「良薬は口に苦し」とはよく言われているが、古代中国では毒薬も良薬もともに同じ意味に使われていて、毒薬にはプラス(良薬)とマイナス(生命を脅かす薬物)との両面を持つ

ていたという。

第一部は「本草学—中国の薬物学」で、中国最古の薬物を記したのは『山海経』だが、薬物を収集、分析、分類、効能、使用法等に及んだのは後漢中頃に成立したと思われる『神農本草経』であった。当時の医学は方技とも言われ、『漢書』芸文志を見ると、方技の中に医経、経方、房中、神仙という分類があることから、この本草書の編集理念に神仙思想が深くかかわっていたと思われる。さらにその三百六十五種に及ぶ薬物の上・中・下経の三分類は以後の本草書の薬物分類の基になっている。

次に南朝・齊の陶弘景は『神農本草経集注』（集注本草）をあらわし、薬物の追加、注釈を加えた。彼はその他多くの書を記しているが、上清派（茅山派）のリーダーでもあったから、その『集注本草』も当然道教の影響がにじんでいる、つまり本草書の理論的背景の神仙思想から道教理論にとシフトしていく。著者はいろいろな説点から本書を高く評価している。

ついで唐代になると『新修本草』（唐本草）がこの時代ただ一つの官撰本草書でその挙げている薬物も八五〇種となっている。この集注、新修本草は我が国に渡って医学教育のテキストとして使われたが、集注が後に新修に代えられていることも忘れてはならない。

その約三〇〇年後、宋代になると印刷術の発展から官民あがての本草が次々と生れてくる。『開宝新詳定本草』『開宝重

定本草』（開宝本草）『嘉祐本草』『図経本草』が、北宋末期になると『経史証類大観本草』（大観本草）『政和新修経史証類備用本草』（政和本草）が出た。後二者を『証類本草』というが、『嘉祐本草』と『図経本草』の合本である。これらを最後として正統的本草書はその姿を消す。

第二部は「中国文人の仙薬嗜好と薬スキャンダル」となっている。

まず寒食散について魯迅の「魏晋の気風および文章と薬および酒の關係」と、余嘉錫の「寒食散考」を紹介している。寒食散は何晏がその流行と弊害の元凶であるとし、白粉（鉛中毒）の被害も受けていたらしいという。『鍼灸甲乙経』の著者、皇甫謐も例外ではなく、竹林の七賢人の中にもこれに染ったものがいたし、仏僧の中にもいた。その治療法は散発と熱酒の服用であった。

唐代二〇名の歴代皇帝のうち、はっきりしないものを含めると多くの皇帝が鍊丹中毒により命をおとし、さらに高官、文人、墨客までこの鍊丹による死亡を含めて多数の人々が被害を受けた。

李白が鍊丹詩人といわれるように、その詩からも沈潜ぶりが伺える。韓愈は鍊丹ばかりでなく道教をも批判したが硫黄を服用し、柳宗元は鐘乳石を愛用し、白居易は鍊丹とは一定の距離をおいていたが雲母を服用した。

最後に出土品からの鍊丹製造を再現し、日本の正倉院に残る薬物から当時の貴族の鍊丹服用は否定できないとしている。

る。

以上本書の内容をコンパクトに紹介したつもりである。

評者も本書の出版よりやや早く『講座道教第五巻 道教と中国社会』の中で「民間医療と道教」というパートを受けもった。その中で期せずして本草が道教と深く結びられていることを述べた。『神農本草経』『神農本草経』（清、孫星衍『本草集注』『新修本草』『図経衍義本草』（『道蔵』に収録）の中でその記されている薬効から仙薬的効能を撰んでみた。するとその第一位は軽身であり、身を軽くして自由に天地を飛翔し永遠の生命を得る仙人への憶いが伝わってきた。仙人のルーツは羽人で、その身はやせ、軽く、翼があり、飛行千里というから現在の飛行機にその姿形は重なる。次いで不老、耐老、不夭、益寿、延年、益氣、耳目聰明、不飢などがつづきともに仙薬的効能をうたっていることが判明した。

本書は道教的見地から見た本草書の流れを紹介し、さらに附随してこれから生じた不老不死の願望から鉱物類の製造なども詳しくのべられている。

一読をすすめる所以である。

(吉元 昭治)

〔大修館書店、千代田区神田錦町三二二四、電話〇三三三二九五—六二三一、二〇〇一年六月一日、四六判、三〇六頁、本体一九〇〇円〕

国際日本文化研究センター編

『宗田文庫目録』

平成八年七月七日逝去された宗田一先生が長年にわたって収集された医学史、科学史、技術史、さらに絵画などを含む膨大な資料類が宗田文庫として国際日本文化研究センターに保存・管理されたのは皆様既に周知の事実である。保存される迄の経過には質において高い貴重資料を数店の古書店が購入の為動いたと聞き及んでいるが、センター設立当初から先生が専門とされた本草史、国学史、医学史の共同研究に携わり活躍された、生前の御遺志と、御遺族の献身的な努力により資料の全てが分散する事なく、保存されている。しかし何よりもセンターに保存されるに至ったのは、国際日本文化研究センター名誉教授、山田慶児先生をはじめとして多くの医史学者、センター内外の研究者の尽力による。

筆者は一昨年より平成十年九月に出版された『宗田文庫仮目録』（総五八五頁）を利用するためにたびたびセンターを訪問し、宗田文庫中の眼科史に関する貴重な文献を閲覧し、参考資料の豊富さに唯々感激し、多くの示唆を受けている。また宗田先生がお元氣であった頃、私が質問すると二、三日たてば数点の資料をコピーしてお渡しいただいた。今この文献を再び目にして、医学史の一部門、眼科史を紐解く際にも、非常に重要な資料である。宗田文庫は、科学史、技術史を研究されている人々、又後進の研究者にとっても文献資料の宝